～週刊オン★ステージ新聞「バレエとオペラ」関連企画 XI～

薄井憲二バレエ・コレクション常設展

vol. 91

《ラ・エスメラルダ》

会期／2022年9月13日(火)～11月16日(水)
(※休館日はwebでご確認ください)

連載／岸純信(オペラ研究家)
協力／渡辺真弓(オン★ステージ新聞編集長／舞踊評論家)
企画・構成／関典子(薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

現在、「週刊オン★ステージ新聞」(青林堂)にて連載中の「バレエとオペラ」関連企画として、常設展をシリーズ開催いたします。本展では、「薄井憲二バレエ・コレクション」から図版提供した記事と共に、実際の資料をご覧いただきます。第11弾は《ラ・エスメラルダ》(2022年5月1日号「バレエとオペラ」第64回)より。どうぞお楽しみください。

----------「バレエとオペラ」第64回 岸純信 ----------
バレエならぬ　ベルタン《ラ・エスメラルダ》

大文豪ユゴーは自作のオペラ化を嫌がった。小説『ノートルダム・ド・パリ』にロッシーニやマイヤーベーアが興味を示すと、彼は「詩人と音楽家の結婚では音楽家が上位に立ち詩人が下に」と撥ねつけた。しかし、突然に方向転換し、同じ小説を自らオペラ用に書き換えて作曲家ルイーズ・ベルタン(1805-77)に提供。結果、歌劇《ラ・エスメラルダ》全4幕(1836)が誕生した。

既に数作のオペラを発表し、文才も有した(後に詩集を発刊)ベルタン嬢は、脚に麻痺を抱える内気な女性であったという。その彼女に同情してか、文豪は筋立てを自ら変えるサービスぶりを発揮。オペラでは士官フェビュスが主人公に寄せる愛情を柱にし、彼女の無実を晴らすべく瀕死のフェビュスが現われて証言。その後彼が絶命して幕となる。ただし、世界初演のその日、パリ・オペラ座の客席は荒れた。ルイーズの実家が発行する新聞『ジュルナル・デ・デバ』紙を、体制寄りと敵視する一派が妨害したのである。(中略)

さて、《ラ・エスメラルダ》の舞踊場面だが、手持ちのスコア(かの大リストがピアノ伴奏化)を改めて開くと、「単独のバレエ場面」が無いと気づいた。公演記録には「第1、2、3幕用のバレエ譜あり」との一行が載るが、ヴォーカル・スコアではそれらが外されたのかもしれない。録音にもバレエ曲は存在しない。

ただし、皆様ご存じの通り、物語の主人公は踊り子である。楽譜をよく読むと、「エスメラルダ、踊りながら登場」という ト書きもあり、受刑中の鐘守カジモドに彼女が水を与える場面(第2幕)には15小節のパントミームがある(CDでは丸々カットで残念)。完全舞台上演の暁には、舞踊の要素がどう盛り込まれるか、万難を排して駆け付けたい。

ちなみに、《ラ・エスメラルダ》にはもう一つの特色がある。それは、オペラ座の歴史で初めて、社会の最下層を描いたこと。開幕冒頭からして〈Chœur des Truands ごろつきどもの合唱〉なのだ。それゆえ「引っ込み思案でも勇気は持っていた女性作曲家」に敬意を表すべく、墓参は長年、欠かさずにいる。

【補足】バレエ《エスメラルダ》全3幕の初演は1844年3月9日ロンドン、ハー・マジェスティーズ劇場。オペラと同じく、ユゴーの小説『ノートルダム・ド・パリ』(1831)に基づく。台本・振付ペロー、音楽プーニ、主演グリジ、ペロー、サン＝レオン、クーロン。プティパ版(1886)、ブルメイステル版(1950)、ベリオゾフ版(1954)があり、同じ物語を扱った作品としては、プティ《ノートルダム・ド・パリ》(1965)や、最も古い版としては、モンティチョーニが1839年にミラノ・スカラ座で初演した版がある。

主な出展資料(全て《ラ・エスメラルダ》)

- ◆AP-115 アンティークプリント／カルロッタ・グリジ／イギリス／1844-1845年
- ◆AP-078 アンティークプリント／ナデジダ・バグダノフ／ロシア／1859年
- ◆SC-16 楽譜／音楽プーニ／カルロッタ・グリジ&ジュール・ペロー／イギリス／19世紀
- ◆PC-B-047-07 葉書／エカテリーナ・ゲリツェル(1876-1962)
- ◆PC-B-077-02 葉書／マチルダ・クシェシンスカヤ(1872-1971)
- ◆PC-B-149-01 葉書／オリガ・スペシフツェワ(1895-1991)
- ◆ST-BL-81 切手／フランス／2003年

兵庫県立芸術文化センター
〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22
tel: 0798-68-0223　fax: 0798-68-0212
※ 禁無断転載・複製・引用